

## 仕事でも遊べる

—安岡章太郎とハシェク・ヤロスラフの短編小説におけるユーモアと皮肉—

ヴェベル・ミハエル\*

### 1. はじめに

チェコの風刺作家ハシェク・ヤロスラフ (Jaroslav Hašek, 1883–1923) は『兵士シュヴェイクの冒険』(Osudy dobrého vojáka Švejka za světové války, 1921-1923) という長編小説の作者として世界でも有名である。ハシェク・ヤロスラフの数多くの短編小説(約1200)の中にも名作がいくつもある。それらを読むと、安岡章太郎(1920–2013)の短編小説が思い浮かぶ。この二人の小説家の生涯はわずか3年間しか重なっていない。無論、会ったこともない。彼らの小説は異なる文化・歴史的環境で書かれている。ハシェク・ヤロスラフは1910年代のオーストリア＝ハンガリー帝国で活躍し、安岡章太郎は1950年代の日本で活躍した。にもかかわらず、二人の生涯や作品において共通点がいくつも見つかる。

### 2. ハシェク・ヤロスラフと安岡章太郎の生涯における類似点

まず、20世紀の状況下、二人の人生を顧みると、驚くほどの類似点が発見される。ハシェクは第一次世界大戦を、安岡は第二次世界大戦を体験し、戦争(戦後)による影響が作品中に表れている。二人とも自身の体験をもとに小説を書いている。

### 2.1 小説家になること

ハシェクの生涯は短く、波乱に満ちていた。貧乏な家庭で生まれ育ったが、成績は優秀で、一旦はエリート養成コースであるギムナジウムで学んでいた<sup>1</sup>が父親に死なれ、勉強を中断せざるをえなかった。貧しかったため、しばらく薬種屋として働いていたが、やがて商業高等専門学校に再入学し、3年後に卒業した。その後、銀行員として勤めていたが、その時にはすでに短編小説を書き始めており、作家になる決意を固めており、新聞や雑誌に寄稿しながら自由奔放な生活を送っていた。1910年には結婚し、子供も誕生したが、一年後、妻に捨てられてしまい、ハシェクは夜な夜なブラハの酒場を歩き廻るでたらめな生活を続けた<sup>2</sup>。その自由奔放な生活を送りながら、ハシェクはいつ小説を書いたのか、小説を書く時間があったのかという疑問が浮かぶ。ともかく1911年の時点で、もっとも勤勉なチェコ人作家だったに違いない。この一年の間にハシェクの120以上の短編小説が出版された。しかし、ハシェクのそれぞれの短編は品質が均一ではない。自分で書いたものの再読や推敲をしないこともあった。たいていは書き終わるとすぐに新聞社や雑誌編集所へ前金をもらうために持ち込んでいた。文体に対する不注意が微罪として低く評価されていたと同時に、ハシェクの小説はその品質が無視されていたに違いない。酒場の雰囲気によって意識と潜在意識が混乱していても、ハシェクはそれらをそのカオスの中で認識できたからである。そこでユーモアに満ち、オリジナルで新鮮なアイデアが生ま

\*カレル大学准教授

れ、ハシェクの短編小説一つ一つの元になったといわれている<sup>3</sup>。

一方、安岡章太郎の児童期は相違した性質がある。それにもかかわらず書き始めた動機は共通点の一つである。実家暮らしをしながら、生活費を稼ぐ苦労がきっかけになったハシェクと同様に、安岡章太郎も父親が戦後に帰還した時、家計を助けるために様々な職に就いた。両作家はこの体験を自分の小説の材料とした。安岡章太郎は結核性脊椎炎を患い、1940年代の終わりに寝たきりになったことで、文学に力を入れる余裕ができた。

## 2.2 世界大戦との直接的な体験

ハシェクは第一次世界大戦に兵士として参加し、戦った。安岡章太郎も1944年に陸軍に学徒動員で招集され、東部六部隊に現役兵として入営、ただちに満州九八一部隊（北満孫呉）へつれて行かれた。そこで、胸部疾患のため入院する。翌日、部隊はフィリピンへ移動。レイテ島で全滅してしまう<sup>4</sup>。1945年には金沢の陸軍病院で肺結核により除隊処分となり、1947年に進駐軍の空き家となっている接收家屋の留守番として就職した。カリエスの悪化は急激に進み、1949年に留守番の仕事を父親にかわってもらう。12月ごろから体力がやや回復し、枕もとに原稿用紙をおいて「ジングルベル」を書いた<sup>5</sup>。

1915年にハシェクも招集を受け、オーストリア軍の兵士としてロシア戦線に加わったが、脱走し、ロシア軍に投降、いわゆるチェコ軍団<sup>6</sup>に参加した。ただ、政治的な方針の意見の相違のため、ハシェクは1917年にロシア革命が起ると、ためらわずにロシア共産党に入党し、赤軍に走り、チェコ軍団と敵対することになった<sup>7</sup>。

ハシェクは第一次世界大戦を、安岡は第二次世界大戦を体験し、戦争あるいは戦後による影響がその作品において描かれている。

## 2.3 ハシェク・ヤロスラフと安岡章太郎の作品における類似点

二人の作品は風刺とパロディーをもとにし、皮肉を使って書かれたものである。ハシェクの作品は、ブラックユーモアが特徴である。時代の苦心談（第一次世界大戦中、または日本戦後の1950年代）を語りながら、ハシェクも安岡も主人公を悩ますことで、読者を笑わせる方法を使用した。二人の文体は時代や地理学上の違いがありながらも共通点が多い。例えば、『正真正銘見世物興行』（ハシェク著）、『愛玩』と『剣舞』（安岡著）のそれぞれの主人公は利益を期待しながら営業に力を入れて行動するが、その努力は失敗してしまう。

また、2016年度の国際日文学コンソーシアムのテーマを考慮に入れ、上述の小説家の作品の内容を考察してから選択した。二人の作品を「はたらく／あそぶ」の概念から観察する。ハシェクと安岡の小説の中で仕事と娯楽がよく混合される。話の流れの中でどちらが「はたらく」、どちらが「あそぶ」のかは区別しにくい。どちらにしても主人公の労働や努力は実を結ばないことが多いが、そこに風刺が生まれる。

## 3. 対象短編小説の紹介と比較

「はたらく／あそぶ」という観点から以下の作品を取り上げる。『正真正銘見世物興行』（1911）、『精神医学上の謎』（1911）、『検閲官氏とのインタビュー』（1911）（ハシェク・ヤロスラフ著）と『愛玩』（1952）、『剣舞』（1953）、『ガラスの靴』（1951）、『ハウスガード』（1953）、『陰気な愉しみ』（1953）（安岡章太郎著）である。

### 3.1 ハシェクの『正真正銘見世物興行』をめぐる

主人公の二人はこれまで様々な営業体験をしたあげく、新しい興行について考えている。客を集め、様々なショーを見せる興行のうち、ノミの

サーカスはその一つである。その他にコウモリをオーストラリア産のトビトカゲとして見せるショー、ヤマカガシをインドでイギリス人の総督を絞殺した大蛇の子として見せるショー、ボルネオ島産のオランウータンを演じていたペピーチェクという子供との見世物興行、英国王リチャード三世のミイラ（実際は羊の毛皮であったもの）を見せるショーもあった。

二人の男たちの営業努力は極端へ走るとも言える。なぜかという、今回の新しい見世物興行は「客に何も見せない」というものであった。小屋の暗闇のなかで何も見せずにすぐ客を外へ押し出すというものである。二人は以下のような会話を続ける。

「辛抱強く事業をやろうとするなら、人間の持つ愚かしさを征服しなけりゃならない。何でも利口に手に入れるようになれることだけが必要だ。アヒルに色を塗りたくるかどうかが問題じゃなくて、それを見に来る連中にアヒルではなくてジャガーだと信じ込ませることが問題なんだ。一度見世物がうまく行かなかったら、二度目、三度目は成功させなきゃならない。」

「大衆なんてとんまなものさ」かれは哲学的論議を続けた。……（中略）……

「ぼくは」とわたしは言った。「自分自身で判断できる連中なんて少ないと思うよ。ちゃんときまった、自分自身の見方をする人は、ふつうそんな所へ見世物を見に行かない。」<sup>8</sup>

客を大勢誘うために看板とビラを印刷してもらう：

「成人男子だけに！大変な驚き！一生忘れられないこの見世物！ごまかしなし！正真正銘を保証！」<sup>9</sup>

一時間半の間に数百人の成人男子が小屋の中を通過する。体験した人は行列で待っている人にこう言う。

「これはすばらしい。あんたたちも行って見て来なさい。」<sup>10</sup>

人間の精神をよく理解したハシェクは、ごまかされた人は他人もごまかされてほしいという意地の悪さをもっているという性質を上手に使い、ユーモアのあるオチをつけた。数時間後、小屋は警察に封鎖され、二人の男たちは裁判所へ連れて行かれてしまう。そうして二人の見世物興行はまた失敗してしまうのである。

### 3.2 『正真正銘見世物興行』と安岡章太郎の『愛玩』と『剣舞』をめぐる

安岡章太郎の『愛玩』と『剣舞』では、ハシェクの『正真正銘見世物興行』と同様にお金を簡単に稼ぐ方法を工夫し、結局失敗してしまうというオチが描かれている。『愛玩』での稼業は、ウサギの毛皮の商売を始めるためにウサギの飼育を中心に進行する。3人の家族が徐々に繁殖していくウサギと触れ合い、実家で同居する努力をするが、結局毛皮の値段が下がりウサギ飼育は失敗してしまう。

『剣舞』でも3人の家族が登場する。そして、三つの営業活動が描かれる。それはタバコの栽培と生産、醤油製造、養鶏と卵の販売である。しかし、どれも成功しない。今作では母親と結核性脊椎炎を患っている息子は父親の稼業に参加しない。息子は語り手となり、誇張しつつ、皮肉であふれた物語を語る。無駄な努力がユーモアのもとになる。

### 3.3 「はたらく／あそぶ」

上述の通り、ハシェクの『正真正銘見世物興行』における稼業はごまかし興行である。働くどころ

か、二人の主人公が仕事としてあまり認識せずに自分たちが（見世物興行の客より）その見世物興行に興ずる。「はたらく／あそぶ」の目で見れば、安岡章太郎の短編においても仕事がたびたび娯楽と混合する。特に『ガラスの靴』（1951）と『ハウスガード』（1953）では主人公の青年が猟銃店の夜番、あるいは進駐軍の接収家室空家の留守番のアルバイトをするが、そこにいるだけで仕事の目的を果たすことができるので、仕事中の時間を自由に使える余裕もあった。

「待つことが、僕の仕事だった。N猟銃店の夜番にやとわれていた僕は、夜の間、盗難と火気を警戒する役目なのだ。しかし、それは仕事にならなかった。段落室の扉のところに掛かっている湿度計と寒暖計、僕はそれと同じだ。火事は、寒暖計でよみとるわけにはいかないし、闖入してくる盗賊とたたかう勇氣は、僕にはなかった。僕はただ、火事と泥棒とがやってくるのを待つだけだ。」<sup>11</sup>

『ガラスの靴』の主人公は悦子という女子と関わり、『ハウスガード』の青年もチャコちゃんという女子と関わる。いずれのストーリーも主人公の自由も女子との関係も突然打ち砕かれてしまう。この夢のような存在の終結の原因はどちらもソトが原因であり、進駐軍将校の行動によるせいである。

ソトの原因だとすれば、「運命の皮肉」で今までの生活を転回させる出来事が小説の基本的な要素の一つとして使用される。だが、それを極端といえるまで描くことができるのは、やはりハシエク的能力である。『精神医学上の謎』（1911）のストーリーのインスピレーションは実際のできごとから湧いた。ハシエク本人が1911年2月9日、朝3時にカレル橋の手すり越しに体を乗り出し、川に飛び込もうとした瞬間、ブラウエル理髪師が必死に命を救ったというできごとがあった<sup>12</sup>。ハシエクは警察に尋問され、精神病患者だと診断され、

精神病院へ入院させられた。二か月後、『精神医学上の謎』という短編を執筆する。以下はその場面の引用である。ハシエクはフリフ氏、ブラウエル理髪師はビーレク理髪師という登場人物になっている。

フリフ氏の思索を中断させたのは川面にひびく叫び声だった。……（中略）……

フリフ氏は橋の手すり越しに体を乗り出して、不幸な予感に満ちながら、ヴルタヴァ川面に向かって叫んだ。

「何かお望みですか？」

氏の人類を愛する気持ちに満ちた心臓が、橋から下へ傾けられていたその瞬間、もっと気のきいたことは何もかれの頭に浮かばなかった。

フリフ氏が探るように下の水の中を見つめていたその時、橋の上をマラー・ストラナの方に向かって大またに歩いてきたのは理髪師のビーレクであった。

この紳士は、この日は特に、絶対禁酒家ではさらさらなかったが、フリフ氏に負けず劣らぬ、隣人に対する正しい愛に燃えた高貴な心、黄金の、献身的な心の持ち主だった。

すばやい視線で、紳士は、フリフ氏が疑わしように橋から身を乗り出しているのを見て取った。ビーレク氏は行動の人だった。……（中略）……見知らぬ男の首をつかみ、「おまわりさん！」という叫び声に続いて、二人の高貴な心の持った男たちは四つに取っ組み合っていた。……（中略）……

見張りの警察官たちが速足で駆けつけた。ビーレク氏はの力でフリフ氏を両腕に抱えつつ、息をはずませながら警官たちに向かって叫んだ。「おまわりさん、この人が川の中へ飛び込もうとしたので、ぼくが救ってやったんですよ！」<sup>13</sup>

この物狂おしく皮肉めいた終結は、安岡章太郎

著『愛玩』の終結方法と類似している。登場人物の日常生活は平凡な事情によって、思いがけなく急変する。

翌朝、氏は精神病院に送り込まれ、そこでもはや一年半看護を受けている。なぜなら、現在までのところ、医師たちは氏について、心の病いの自覚の確認ができなかったからである。この自覚こそ、精神医学に従えば、精神状態改善のしるしである。<sup>14</sup>

### 3.4 恥と社会への態度をユーモアに

次に安岡章太郎著の『陰気な愉しみ』(1953)とハシエク・ヤロスラフ著の『検閲官氏とのインタビュー』(1911)における主人公の恥について述べたい。どちらもユーモア、あるいは皮肉に富んでいるが、恥の概念において相違点が見られる。恥の原因が異なるからである。

『陰気な愉しみ』の主人公の恥は、働かず金をもらうことが原因になる。そして、この主人公は日常生活の愉しみを通して、他人と同じ様になりたがる。毎月役所で金をもらうと、町を歩きまわり、できるだけ他人が買うものを手に入れたがる。ある意味で社会から隔離されているため、自身も社会の一員になりたがる。こうして恥を抱く主人公の短編すら安岡章太郎が皮肉に終結させてしまう。価値があるものではなく、ほしいものではなく、主人公は結局金を無駄に使ってしまうからである。靴を磨いてもらい、電車で帰宅する。以下は『陰気な愉しみ』の最後の段落である。

汽車がくるまでには、だいぶ間があった。ながいプラットフォームを私は、はじからはじめまで一人で歩いた。…きょう一日中の愉しみを塗りこめて光っている靴をはいた足で。』<sup>15</sup>

一方、『検閲官氏とのインタビュー』の主人

公の恥の原因は自分が検閲官であることではなく、自分が幼年時代から他人と違うことである。

かれは悲し気にほほえみ、もっと近寄ってその頭蓋骨をよく見てくれと乞った。かれの額はとても低く、頭はひしゃげていった。

「わたしについてこう書かれています」と彼は言った。「若い時に木から落ちて地面に頭をぶつけた、頭から落ちたのだ、と。しかしそれは本当ではありません。わたしの頭は、生まれて間もなく、ぎゅっと押さえつけられたのです。近眼の医者がわたしの頭の上に座ったからで、おかげでわたしの頭蓋骨は典型的なべちゃんこです。初めの頃は、みんな、わたしが永持しないだろう、もししても、とても頭が弱くなるものときめていました。でも、神様のおかげで、わたしはすべてに堪えて、今日では検閲官になっています。』<sup>16</sup>

その「今日では検閲官になっています」という言葉から誇りが感じられるに違いない。検閲官は名誉ある地位だという誇示である。主人公は検閲官として社会を保持するため社会から離れているという事実に気付かないようである。その自慢をハシエクは風刺にする。

## 4. おわりに

チェコ風のユーモアは、歴史における困難な時期に生じる。それ故、チェコ語という言葉の様々な水準の中に隠れてしまう。言葉そのものがユーモアの保有者になり、チェコ語は逸話があるオチに向かい、意味論的に性急に捕まえられない言葉として数多くの才能に恵まれた語り手によって使用される<sup>17</sup>。それを外国語に翻訳すると、このユーモアの一部が喪失してしまう。だが、ハシエク・ヤロスラフの数多くの短編小説や『兵士シュヴェイクの冒険』が世界中の言葉に訳され、読ま

れているのは、この「チェコ風」の典型的なユーモアが多能であることの証拠であるのではないだろうか。

本論文は異なる時代、状況、国、国籍、社会の雰囲気や文化の影響で活動した二人の作家の作品の共通点を紹介し、比較することを目的とした。より深く分析が不可能なため結論は単純なものであるが、上記の比較により、文学の能力は時代、国境などを超え、世界中どこであろうと人間の唯一の体験を伝えることができるものであるとわかった。

#### 注

- 1 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, p. i「まえがき」より
- 2 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, p. ii「まえがき」より
- 3 Radko Pytlík (1971) 「Toulavé house」Mladá fronta, pp. 173-174より。引用の訳：ウェベル・ミハエル。
- 4 『現代日本の文学45巻』p. 411
- 5 『現代日本の文学45巻』p. 411
- 6 チェコ軍団は当時反オーストリアで、チェコ独立運動派であった。
- 7 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, p. ii「まえがき」より
- 8 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, pp. 173, 175. 『正真正銘見世物興行』より
- 9 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, p. 187. 『正真正銘見世物興行』より
- 10 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, p. 189. 『正真正銘見世物興行』より
- 11 『現代日本の文学45巻』p. 112 『ガラスの靴』より
- 12 České slovo新聞1911年2月10日朝刊より
- 13 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, pp. 141, 143, 145. 『精神医学上の謎』より
- 14 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, pp. 159, 161. 『精神医学上の謎』より
- 15 『現代日本の文学45巻』p. 140 『陰気な愉しみ』より
- 16 『ハシェク風刺短編集』飯島周訳注, pp. 21, 23. 『検閲官氏とのインタビュー』より
- 17 Radko Pytlík (2000) 「Fenomenologie humoru」Emporius, p. 8より。引用の訳：ウェベル・ミハエル。

#### 参考文献

- 『現代日本の文学45巻：安岡章太郎・遠藤周作集』  
(1971) 学習研究社  
飯島周訳注『ハシェク風刺短編集』(1989) 大学書林  
飯島周訳注『平凡な人たち—ハシェク風刺短編集』  
(2002) 平凡社  
Radko Pytlík (2000) 「Fenomenologie humoru」Emporius  
Radko Pytlík (1971) 「Toulavé house」Mladá fronta